

BOOKS & TRENDS



人が自分をだます理由

自己欺瞞の進化心理学

ケヴィン・シムラー、ロビン・ハンソン 著／大槻敦子 訳

原書房 2700円＋税／396ページ

profile

Kevin Simler

ライター、ソフトウェアエンジニア。テクノロジー関連で新興企業の顧問も務める。

Robin Hanson

米ジョージ・メイソン大学経済学准教授。AIとベイズ統計学のプログラマー経験も。

うまくだませば
好結果を生む場合も

評者 スクウェアイブ社長
黒須豊

試合中にケガをしても「こんなのはたいしたことはない」と戦い続けるボクサー、明らかに疲労がたまってきても、疲れていないと思いついで走るマラソン走者……。人はごく普通に内心の動機を隠して行動するが、実は自分さえも頻繁に欺こうとしていると著者らは主張する。前述の例で言えば、彼らは実際に「痛い」「疲れた」とは感じていないのだ。つまり、自分をだますことに成功している。実際に、競泳選手に関する先行研究では、自分をだますことに長けた選手ほど重要な

試合で好成績だったという。いいことばかりではない。健康診断でコレステロール値が高かった人は、問題のない数値を記憶するという。

本書の主張に読者から反論は出ないだろう。それは、話し好きの著者らによる十分過ぎる説明があることが大きい。著者らの熱量が多いがために多少読み辛いと感ずるかもしれない。ただ、読破しなくても主張は理解できる。第2部は興味を引かれる章を読めばいい。

著者らが本書を書き下ろした内心の動機を例証の1つとしている点は興味深い。その内心とは、普段の仕事を犠牲にしても読者にとつて有意義な内容を発表したいというよりも、表紙に自分の名前が載った本を出してみたかったというものだ。

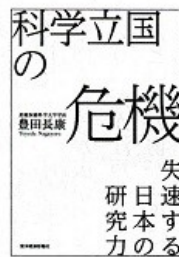
素直で可愛げのあるナイスガイだと高く評価したが、ふと、評者の脳裏に疑念が浮かんできた。

もしかしたら、著者の内心の動機は、はなから、読者の好感を得ることであり、単に小難しい話を論じる人間ではないと思われたかたのではないか。もちろん、真相はわからない。

Canon
make it possible with canon

ソリューションは必ずある。

お客様のビジネスをトータルで支えるソリューションカンパニー
キヤノンマーケティングジャパングループ
canon.jp



科学立国の危機

失速する日本の研究力

豊田長康 著

世界の大学ランキングで日本の凋落ぶりは著しい。優れた論文の数で欧米のみならず中韓にも後れを取っていることが最大の理由だ。大学の研究教育力とGDPには強い相関があるというところから推論は始まる。

ために上位校以外の大学は予算削減と競争原理で疲弊の極みに立たされた。過度の選択と集中は無益有害だと本書は厳しく指摘している。

「イノベーションを上げ、地方の活性化を達成するために、裾野にいて効率の悪そうに見える地方の中小大学への積極的支援と、多様性を重視しながらの「ヒトへの公的な投資」こそ重要だという。収録された多数の現場の声も著者の主張を裏付ける。220枚の図表とともに530ページにわたる堂々たる正論が展開された労作である。(純)

東洋経済新報社
2600円＋税